

創立60周年
since 1962

東京バッハ合唱団 月報

[第719号] 2022年5月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.719

May 2022

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

創立60周年記念企画“この60年を振りかえる”第5回

50周年まで(1993-2012) … バッハ日本語演奏の充実

大村 恵美子 (主宰者) / [編集部補注]

前回は、30周年までを取りあげて、東ドイツ芸術公団の招聘により、ライプツィヒ聖トーマス教会での邦人合唱団として初の公演(1983年)を果たすなど、ドイツとの直接の交流が始まったことに触れました。

教会カンタータを中心として日本語上演をつづけながら、大曲としては《クリスマス・オラトリオ》全6部を、前半、後半の3部ずつに分けて、ほぼ毎年末にお聴かせすることを恒例としてきましたが(後にクリスマスシーズンのカンタータも加えて上演)、もちろん初回から日本語での上演でした。《ヨハネ受難曲》は、早くも創立5年目に日本語で取りあげましたが、《マタイ受難曲》は当初、ドイツ語原詞での客演や協演の機会がつづき、私の訳詞による日本語初演は、意外にも創立20周年(1982年)のことでしたし、バッハ音楽の真髄ともされる《ロ短調ミサ曲》の日本語初演に至っては、創立50周年記念の連続演奏(2011年~13年)を待たねばならなかったのです。大曲好みの世間の趣味とは容れないようですが、私の心情として、上のような大曲よりも、珠玉の教会カンタータ群により惹かれている、というのが実のところではあります。

活動の半世紀を迎えるころには、現存するカンタータのほぼ全曲の訳詞を、「新バッハ全集」のカンタータ編各冊の譜面上へ書き込みを終えていました。定期演奏会で取りあげる数曲のカンタータのまとまりに、たとえば「豊饒のライプツィヒ」(第77回)、「地なるいのち」(第93回)などと、表題をつけてみる試みもはじめています。奏者も聴者も、ともに親しめる日本語演奏ならではの可能性だと思います。

2011年に『バッハ コラール・ハンドブック』を上梓したのも、200曲ほどのカンタータに登場するコラール訳詞の統一という課題に取りくんだ過程での副産物だったのです。バッハの合唱作品への訳詞付けがかくして成就し、今後の収穫を待つばかりになりました。

1993年

- ・1月9日(土)、土曜日の練習場が本日より、経堂の世田谷YMCAから桜新町の世田谷中央教会に移転。
- ・8月8日(日)~22日(日)、第3回ドイツ演奏旅行、バッハの故地歴訪:ハンブルク/リュベック/(ブレーメン/)ツェレ/ベルリン/ポツダム/ライプツィヒ、以上訪問順。モ



■シラー (Scilla, ユリ科) [荻窪教会前花壇、写真:千葉光雄]

テット BWV225, 229、カンタータ BWV39, 78, 196。BWV196は日本語。上演はベルリン2教会とポツダムの教会、指揮大村恵美子、Org 長谷川美保。

1994年

- ・4月25日(月)、ドイツからアンメ牧師(ドイツ巡演の現地主催者)夫妻来日、5/17の帰国まで、団員有志が日本国内を案内。明治学院大学、東京女子大学、世田谷中央教会等での説教や講演を支援。

1995年

- ・5月6日(土)、第77回定期演奏会(「豊饒のライプツィヒ」、モテット BWV227、カンタータ BWV37, 83, 93, 154)、指揮大村恵美子、S 名古屋木実/A 佐々木まり子/T 平良栄一/B 宇佐美桂一、Org 草間美也子、東京カンタータ室内合奏団。

1997年

- ・8月6日(水)~16日(土)、第4回ドイツ演奏旅行、バッハの故地歴訪(おもに幼少期・青年期の地方:アイゼナハ/アルンシュタット/ミュールハウゼン/ドルンハイム/オールドルフ/ヴェヒマル等)。ケルン/アイゼナハ/ライプツィヒ/ベルリンで公演(モテット BWV228、カンタータ BWV21, 150, 196。内21は日本語)、指揮大村恵美子、独唱 S 光野孝子、Org 草間美也子。

1999年

- ・7月27日(火)、ウルリケ・ゲプハルト牧師(ケルン・ボ

月報 2022年5月号 CONTENTS

- ・なぜ人が人を殺すのか(大村恵美子) …p. 3
- ・お便り(橋本絹代 / 西村清志 / 大西洋司) …p. 3
- ・連載:退屈するのはいそがしい [15] (大野博人) …p. 4

ンヘッファー教会) 来日記念講演会 (目白聖公会)

・8月8日(日)、ワルブレヒト・ファミリー(*)のコンサート、五反田ドイツ語福音協会。

2000年

・5月14日(日)、第87回定期演奏会(「2000年に蘇えるバッハ」、ミサ曲ト長調 BWV236、カンタータ BWV56、106、156)、指揮大村恵美子、S 光野孝子/A 佐々木まり子/T 佐々木正利/B 渡辺明、Org 草間美也子、東京カンタータ室内合奏団、石橋メモリアルホール。

・5月、『バッハ・カンタータ 50 曲選』(今日の『日本語版バッハ・カンタータ楽譜全集』の前身) 第1回配本(全10曲)、以後毎年10曲ずつ刊行し、2004年に完結。

2002年

・5月12日(日)、第91回定期演奏会・創立40周年記念公演《口短調ミサ曲》、指揮大村恵美子、S I 光野孝子/S II A 佐々木まり子/T 佐々木正利/B 水野賢司、Org 草間美也子、東京カンタータ室内合奏団、石橋メモリアルホール。

2003年

・5月10日(土)、第93回定期演奏会(「地なるいのち」、モテット BWV226、カンタータ BWV1, 26, 30, 47)、指揮大村恵美子、S 光野孝子/A 佐々木まり子/T 平良栄一/B 渡辺明、Org 草間美也子、東京カンタータ室内合奏団、石橋メモリアルホール。

2005年

・5月15日(日)、第97回定期演奏会「カンタータ 50 曲選 完結記念 I」(BWV129、137、116、147)、指揮大村恵美子/橋本真行、S 光野孝子/A 佐々木まり子/T 佐々木正利/B 宇佐美桂一、東京カンタータ室内合奏団、石橋メモリアルホール。

2007年

・3月21日(水/祭日)、「第100回」定期演奏会・創立45周年記念《マタイ受難曲》。指揮大村恵美子、S 光野孝子/A 佐々木まり子/T (福音史家) 鏡貴之/佐伯正巳/B 渡辺明/佐々木直樹、松山バッハ合唱団協演。東京カンタータ室内合奏団。

2009年

・8月21日(金)~9月1日(火)、第5回ドイツ演奏旅行。フライブルク大聖堂の日曜ミサで演奏(BWV235よりKyrieとGloria、BWV232よりSanctus)。シュトゥットガルト・パウロ教会で同聖歌隊と共演(BWV8)、BWV131(日本語)、BWV191、指揮大村恵美子、S 光野孝子、fl 山田恵美子、pf 金澤亜希子、他に宗教歌曲より(S独唱)、など。

2011年

・3月11日(金)14時46分、東日本大震災。直後に福島第一原発事故。

・3月20日、『バッハ コラール・ハンドブック』発行。
・12月3日(土)、日本語初演の《口短調ミサ曲》で、創立50周年記念「バッハ4大作品[日本語]連続演奏」始まる(連続演奏[1]・第106回定期演奏会、杉並公会堂)

2012年

・7月8日(日)、創立50周年記念懇親会、アルカディア市ヶ谷(私学会館)記念講演:笠原芳光。

・7月28日(土)、世田谷中央教会での練習がこの日で最後。

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

創立記念公演(5/14)に寄せて

大村 恵美子

今年、「東京バッハ合唱団」創立60周年という記念の年。昨年の月報を再読してみると、2021年7月号(No.709)には、「来年は“けまん草”の創立60周年祝い」と、1年後の予告記事があります。

花に譬えて、「ばら」が花の女王、「けまん草」は別名「鯛釣り草」とも言われて、〈草〉の一種、その「けまん(華鬘)草」のようなものが、私達の「東京バッハ合唱団」だと考えられる——というような内容で、私が書いたもの。



■けまん草(写真:千葉光雄)

プロの合唱団は「ばら」のような存在だが、私達のアマチュア合唱団は、〈花〉ではなく〈草〉。けれども「けまん草」に譬えられるように、小さいながら、独特な色合いを帯びた存在で、

J.S.バッハの200曲近くものカンタータ(これは周知の通りの偉大な作品群)を日本語に訳して歌って、どんな人にも、それぞれに親しみを感じさせる内容を届け続けている。

目下のコロナ禍のせいで、公演の機会も練習日数も少なくなり、団員数も減って来たけれど、相変わらず従来の働きをまともに続けて、5月14日には大きな杉並公会堂(いわばホームグラウンド)で、その成果をご披露することになっています。

私自身は、ただの趣味ではなく、これで多くの方々に、人間の生きる喜びを、共有していただくことを念願しているのです。紆余曲折はありましたが、ここでようやく実現出来る段階にいたり、私達に賛同していただける方々のご来場を、心よりお待ち申し上げております。

どうぞよろしく。

9月から、日本キリスト教団荻窪教会が新たな練習拠点に。

・11月9日(金)、「バッハ4大作品連続演奏[2]《クリスマス・オラトリオ I-III部》(第107回定期、杉並公会堂)

[補注:編集部]

*)ワルブレヒト・ファミリー(一家)

ご当主ゲルハルト氏は、当団のライブツィヒ・トーマス教会公演(第1回演奏旅行、1983年8月11日)をお聴きになったそうだ。その後1985年に東独から来日、新日本フィルのヴィオラ奏者として活躍(先月号月報で、ゲルハルト氏の楽器をVCとしたのはVaの誤り)。ご一家をあげて当合唱団と親交をつづけられた。

1988年第2回ドイツ演奏旅行にソプラノ団員として参加した末娘すみれ(ヴィオラ)さん(10歳前後だった?)の、アイゼナハのバッハ像前でのご祖父との再開シーンは感動的だった。当市で代々牧師の家系だそうで、バッハ一族との親近を想わされる。

長男はチェロ、長女はヴァイオリンで、何度かの定期公演や野尻湖公演にも参加。ファミリーコンサートの際には、奥様(滋賀幸子さん)がピアノを担当された。2001年ご一家でドレスデンへ移住。

[次回が最終回(2013年~2022年)]

創立 60 周年記念公演、開催のご案内

第 121 回定期演奏会

【日時】2022 年 5 月 14 日（土）、14：00 開演

【会場】杉並公会堂大ホール

（JR 中央線/総武線/東京メトロ丸の内線「荻窪駅」北口 7 分）

*

カンタータ第 21 番《われは愛いに沈みぬ》

カンタータ第 1 番《あしたに輝く たえなる星よ》

カンタータ第 147 番《心と日々のわざもて》

*

ソプラノ：光野孝子、アルト：谷地岬晶子

テノール：鏡貴之、バス：山本悠尋

管弦楽：コレギウム・アルモニア・スペリオール・ジャパン（ARS）

オルガン：室田千晶、合唱：東京バッハ合唱団

指揮：大村恵美子

■チケット（全席指定席）

A 席：4000 円（当日 4500 円）、B 席：3000 円（当日 3500 円）

■お申し込み/お問い合わせ

メール office@bachchor-tokyo.jp 電話 03-3290-5731

東京バッハ合唱団事務局 <http://bachchor-tokyo.jp/>



バッハを愛する皆様

橋本 絹代（4 月 16 日、写真も）

昨日はライブツイヒ・聖トーマス教会で 2 年ぶりに、正常な私たちで聖金曜日のマタイ受難曲が演奏されました。過去 2 年間は 1 階で演奏し、バッハの墓は隠れてしまい、教会内にはライブ配信のカメラがいくつも配置されていました。今年は 2 階に、ゲヴァントハウスオーケストラとトマナコアがぎっしりと並ぶ、いつもの光景に戻り、嬉しい限りです。昨日のコンサートの写真を添付します。指揮は新しいカントルのライゼです。

（筆者は「やわらかなバッハの会」代表）

なぜ人が人を殺すのか？

大村 恵美子（主宰者）

最近の新聞を読むと、ひどいことが多々書いてある。幼稚園児と外出の際に、付き添いの先生が人数を数え忘れて園児を公園に置き去りにする——。以前にも、点検を怠って送り迎えのバス内に園児を置き忘れた事件があった——。さらなる悲劇は、ウクライナに侵入のロシア兵が、市民らをも手当たり次第に殺しまくる——。まだ挙げれば書かれていることが幾つもあるけれど、胸が悪くなるので全部は書かない。

どうして、やられる方にそれほど無関心で、そんな行為に及べるのだろうか？ 自分が相手のほうの立場になったら、と、ちょっと考えるだけで、恐ろしくならぬのだろうか。今までも、そうだったのかもしれないが、自分が受け身になった場合のことを想像するだけで、とても恐ろしくならぬか？

私は、他のこまかい配慮は何にも注意しなくてもよいから、身体・生命に危害を及ぼすことだけをマークして、厳禁する教育を徹底させるべきだと考える。

ひと昔前までは、親が子を、教師が生徒を、よく殴ったり叩いたりしていた。それを誰も止めもしなかった。保護者が平気で子どもに「死ね」とか「出て行け」とか怒鳴っていた。言われるほうには、とても怖い世界だった。

今は、そんなことを許してはいけぬ。この世に生まれてきた者には、生き続ける権利がある。誰でもが保護されて、与えられた寿命まで生き続けられるように、全員が助け合うべきだ。身体・生命への妨害に関して放任することは悪である。このことを、私は声を大にして訴えつづけたい。

お・た・よ・り

西村 清志（後援会員、小樽市在住）

ぼくは昔から、世の中の根幹は、真・善・美の三つの価値観によって支えられていると、なんとなく信じてきたのですが（これはフランスの哲学者クーザンが提唱したことらしいです）、このところあまりに理不尽なことが続発しているのので、「いったい、世の中の仕組みはどうなっているんだ」と自問する昨今です。老人特有のグチかも知れませんが、それでは。

大西 洋司（後援会員、新潟市在住）

コロナ禍のもと、沈黙化をみこして 5 月公演の準備を進めてください。暗闇の中では、小さな光も輝きます。

バッハ・カンタータの場景 [番外]

スペースがなくなりましたので、No. 11 は次号に順延します。日本語版楽譜全集・第 1 年次（全 12 曲）の具体的なファンディング内容をご紹介します予定です。

なお、来年前半の公演曲は、上記の出版予定 12 曲の中から選曲しました（BWV 12、BWV 22、BWV 11）。各作品の魅力をお伝えしつつ、組み合わせの妙、相乗の意味深さにも触れてみたいのです。（大村健二）

◆上演用歌詞対訳は、当団 HP からご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

<連載随想> 退屈するのはいそがしい [15]

むかし、むかし……

安曇野閑人 大野 博人

へえ、こんなところに名曲喫茶があるんだ。入ってみようよ。

もう半世紀近くも前のことである。東京の小田急線経堂駅前すずらん通りの入り口近く。つき合っていた彼女を家まで送る途中に気づいた。店名は「カフェハウス・バッハ」。開店して間がないみたいだ。二人とも大学の同じオケで演奏していたので、興味がわいた。

当時、名曲喫茶はあちこちにあった。音楽を聴きたくても、下宿にあるのはラジカセくらい。いい音で楽しむために、ちゃんとしたオーディオ装置を備えている喫茶店に行く学生は多かった。

名曲喫茶には独特の雰囲気があった。客は静かにコーヒーを飲みながら本などを読み、耳を傾ける。椅子が大きなスピーカーに向かって並んでいたり、友だちとしゃべっていて声が大きくなると、店の人や他の客から「しーっ」と注意されたり。たくさんのLPレコードが置いてあり、飲み物や軽食のメニューのほかに、何ページにもわたるレコードのカタログがあって、リクエストもできた。

タイスの瞑想曲にうっとりしているカップル、牛乳瓶の底みたいながねをかけ、眉間にしわを寄せてバルトークの弦楽四重奏に聴き入るおじさんのような学生……。

でも、その喫茶店はずいぶんちがった。

通りに面した建物の一階奥にあった。入ると大きくて丸いテーブルのまわりに席が並んでいる。静かにレコードを聴くというより、気楽に居合わせた客同士がおしゃべりを楽しむのによさそうな空間だった。

「いらっしゃい、どうぞ」。声をかけたマスターはまだ若くて長髪だった。親しみやすそう。でも口の端を片方だけ少しあげる笑顔に、斜に構えた感じをただよわせている。話が合う気がした。

それから、毎週のように顔を出した。

聴きたい曲をときどきリクエストしたけれど、置いてあるのはバッハのレコードばかりだったようだ。

あるコンサートではじめて聴いた大バッハの息子

ヨハン・クリスティアンの曲がとてもすてきだった。もう一度聴きたくて、立ち寄ったと

きにリクエストしたら「悪いけど、うちにはヨハン・セバスティアンのレコードしかないんですよ」。店が「ヨハン・セバスティアン」の曲に熱心に取り組む東京バッハ合唱団の拠点だと知った。

夏になると、「カフェ・ダルプ」という名前のアイスコーヒーをいつもたのんだ。背の高いグラス

の下の方に濃いコーヒー、その上にホイップした生クリームを層。たしかに雪をかぶったアルプスを連想させる（といっても、ほんもののアルプスには行ったことがなかった）。クリームは白い線を描きながらゆっくりとコーヒーの層を下りていく。なんてエレガントなんだ。味わう前から感動していた。

ある日、マスターがいつになく浮かない顔だった。

「困ったよ。もうすぐ30歳になっちゃうんだよ」

30歳！若い僕らは心から気の毒に思った。

常連になると、マスターの大村健二さんと、合唱団主宰者で指揮者の恵美子さんのご夫妻に誘われて演奏会にもうかがうようになった。いっしょに通った彼女は、恵美子さんからピアノを習い始めた。

それからほどなく僕らは結婚し、新聞記者になった僕の初任地、佐賀に引っ越した。そのあとは2、3年ごとに国内外を転勤するめまぐるしい年月が続いた。足は遠のいた。けれど、また行きたいなど忘れることはなかった。

30歳になるマスターを憐れんだ僕らが、今は67歳……。

恵美子さんが月報に書かれている「この60年を振り返りかえる」企画の先月号の記事に、閉店したのは1989年とあった。

カフェはもうない。僕らも首都圏を離れ、安曇野に暮らしている。

でも去年の初夏、マスターに「カフェ・ダルプ」の作り方を教えてもらった。そのとおりにつくって味わったら「カフェハウス・バッハ」の光景と自分たちの青春時代が絢(な)い交ぜになってよみがえった。

拙宅の前の雑木林は日に日に新緑が増している。また「カフェ・ダルプ」の季節になる。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



[編集後記]

・安曇野閑人氏の今回には、編集子周辺も登場させていただいた。光栄です。斜に構えてましたか……。

・お送りくださった写真は、カフェハウスの開店案内ハガキ(1975年)。もう我が家にもありません。表(上)は友人の若いデザイナーが、キュビズムの原画をリライトした図柄。裏は小生の下手なイラスト地図でした。